

5 「群れ」を忘れたホモ・サピエンス

—子どもの育つ環境、幼老共生の提案—

碓精神医学研究所 所長

碓 浩一

1 群れ遊びを失った子どもたち

かつて子どもたちは群れて遊ぶものであった。ひとり、ふたりと路地に出てきた子どもたちがいつの間にかあちこちで4～5名の群れを作り、「影踏み」で追っかけごっこをしたり、ビー玉、コマ回し、ジャンケン、寒いときにはおしくらまんじゅうをしたり、誰かの泣き声が聞こえたり、路地からは子どもの喧噪が絶えなかった。遠い昔のことである。いまやそんな子どもが群れて遊ぶ情景はなくなってしまった。あたかも神隠しにでも遇ったかのように、昼間の住宅地から子どもたちが消えて久しい。子どもたちは塾や屋内で勉強やゲームに忙しく、屋外で群れて遊ぶことなど殆どない。屋外で遊ぼうにも道路も公園も、町にわずかな空き地も危険である。車やストーカーが危険であるだけではない。昔から子どもが群れる場所には随所に大人の目があったが、今や大人も忙しく、子どもに目を遣るヒマもないようだ。

数年前に長崎で中学生の少年が幼児を駐車場の屋上から突き落として殺害する事件があった。ある種の発達障害のあった少年は幼児の手を引いて商店街を歩き、通行する大人に、「今何時？」と、何度も唐突に尋ね、路面電車に乗り、ついに誰にも見とがめられず事に及んだのである。このことはとんでもない異常事態というべきである。

本来、ヒトは群れて生活すべき動物である。しかし、産業社会はヒトの「群れ性」を無視してきた。家族、子ども、高齢者、地域社会は有機的なつながりを失い、その結果、子どもは育たず、高齢者は孤立し、家庭は機能しなくなりつつある。崩壊の危機に瀕している。

百万人を超えると言われるひきこもり、就職せず、勉強もせず、職業訓練も受けようとせず、一見平然と暮らすニートが60万余人。こうした傾向をはらむ高等学校の中途退学者が10万余、小学生・中学生の不

登校が13万余。さらに虐待児に象徴される育児困難、情緒障害など、各種の子どもの成育障害、低年齢化する青少年犯罪、若者の無気力、DV、中高年の鬱など、現代社会は衆目の一致するところ、ヒトが種としての適応可能な範囲を逸脱しつつあるようだ。その原因はひとえに日々の生活で「群れ性」を社会が見失ったことによる。



子ども達はどこでも群れている (新疆ウイグル自治区ホータンの農村の風景 1997年)

2 「徳」は群れになじむところから形成される

霊長類は個体としては生き延びることはできない。乳児は「胎外胎児」と言われるほど、絶対的に無力である。群れの保護がなければ一日たりとも生き延びることはできない。したがって、サルもヒトも共通して、発達過程に応じて、群れになじむこと、群れのルールを学習すること、それが社会的動物である霊長類の生存の条件である。個体の自立とは集団の作法を身につけることである。

「宮崎県の幸島の群れで、アオメという雌ザルの子が死んだ。私が死因を確かめるため死児をとろうとすると、母親のアオメが死児を置いて私に向かってきた。そのとき、その兄のボラが死んだ妹の側に駆け寄り、しっかり番をした。」(河合雅雄・『子どもと自然』岩波新書)

河合氏のこの描写は、多少、擬人化のきらいがあるかも知れないが、群れの成員がしっかり助け合って生きている様子をありありと示している。母ザル、兄ザルの愛情、責任感、役割意識など、人間の徳性と容易になぞらえることができる行動である。

サルはしかし、愛や責任を意識して行動しているのではない。本能的に、群れの生活の中で獲得された行動である。それは、たとえば次のよ

うな群れの生活の中で、自然に培われるものである。

「日本ザル社会は、母と子どもたちによる強い絆が親和関係の網目を作っており、それが群れの社会構造を支える重要な柱の一つとなっている。……子どもはいじめられたり年長の者に威嚇されたりすると、大声で叫んで助けを呼ぶ。この行動をよくするのは、順位の高い（グループ内で力を持った）母親の子であるが、母親はすぐさま駆けつけて子どもを助け、相手をやっつける。母親が近くにいなければ、きょうだいが出てきて、弟や妹を助ける。そうすると、小さな子どもも母やきょうだいをバックにして急にいばりだし、強い相手に勢いよく向かっていく。……小憎らしいほどだ。」（同上）

サルは本能として群れのルールを自然に身につけるが、ヒトはどうか？ ヒトは学校教育によって社会のルールを身につけると誤解しているのではないだろうか？ 逆立ちした発想である。ヒトもサルと同様に、まず「本能的」に群れのルールを学習しなければならない。そこからしか徳性の涵養はできない。このことを現代社会がほぼ完全に忘れ去っている。ものごころのつかない頃から集団を支配するルールを身につける機会に恵まれなければ社会的動物としての人間の成熟はあり得ない。したがって、徳育は乳幼児の課題なのである。徳育というといかめしいが、子どもは集団で協同して生きる術をあそびの中で自然に身につける。感情のコントロールは理性によって行うものではない。群れの中で条件反射のように培われるものである。

ロバート・フルガムは、「人生の知恵は幼稚園の砂場にすべてがあった」と言う。

「……人間、どう生きるか、どのようにふるまい、どんな気持で日々を送ればいいのか、本当に知っていなくてはならないことを、わたしは全部残らず幼稚園で教わった。人生の知恵は大学院という山のてっぺんにあるのではなく、日曜学校の砂場に埋まっていたのである。わたしはそこで何を学んだらうか。何でもみんなで分け合うこと、ずるをしないこと、人をぶたないこと、使ったものはかならずもとのところに戻すこと、……、誰か傷つけたら、ごめんなさい、と言うこと……。」

これらができれば幼くしてすでに仁者と言うべきである。

いわば暗黙知（M. ポランニー）ともいうべき、言語以前の経験知によってホモ・サピエンスとして生きる基盤を獲得する。しかるのちに、人間はそれを言語化、抽象化する。

3 イジメと集団葛藤

そこで現代社会の緊急の課題は、如何にして、少なくともサルの群れに匹敵する乳幼児の養育環境を作るのかという、やや情けない話になってくる。

イジメによる子どもの自殺がマスメディアに煽られたように続発した。学校の当事者や教育委員会はイジメはなかったと云い、家族や市民団体はなかったはずがないと学校側を追求する。そのうち子どもの遺書や、同級生の証言で旗色が悪くなると、学校側は前言をひるがえし謝罪する。いつの場合もその繰り返しであった。誰もが心のなかで感じているように、イジメがないはずがない。人間社会では日常的な事柄である。

イジメとは、逃げ場のない、心理的に閉ざされた環境の集団が不安、攻撃衝動、さらには嫉妬心を、一人に向ける状況を言う。犯人捜しは無益である。そうした子どもの状況を変えていかねばならない。

イジメは集団から孤立することの不安が導因と言ってもよい。事実、いじめられる側もいじめられる側も孤独である。子どもたちは人と関係を持つ、人と心をつなぐ手がかりを知らず、傷つくことをおそれている。子どもたちはイジメをまるで遊びのように愉しんでいる。他方イジメを受ける子どもはイジメられながら、なおかつ遊ぼうと思っている。それがイジメが続く原因である。

イジメは真正の遊びに変えなければならないのである。集団の中で個々の子どもに必ず生じる不安、攻撃衝動、人を妬む心は、群れて遊ぶなかで生き生きと表現されなければならない。遊びのなかで、人を妬む心と、人に妬まれる時の心の両者を集団の全員が体験する、共感する心はここでやしなわれる。それはすでに徳性の醸成でもある。徳性とはつねに集団が所有するものである。徳なき子ども集団、それは大人社会の写し絵である。

4 わらべうたに見る群れ遊び

かつて我が国ではイジメをする代わりに子どもたちは群れて遊んでいた。暮らしの周辺にはいつも子どもの喧噪とわらべうたが響いていたが、すでに遠い、郷愁を誘う思い出となってしまった。わらべうたは子どもたちが集団に馴染み、人として成熟してゆくための童謡(ワザウタ)であった。そこにはイジメという集団葛藤のみならず、あらゆる人間社

会の災禍の所在を暗に指し示し、やがて来るであろうそれらの困難に立ち向かってゆく力、徳の醸成へと導く大人たちの知恵が秘められている。

かごめかごめ 籠の中の鳥は いついつ出やる

夜明けの晩に ツルとカメがすべった 後ろの正面だあれ

子どもたちが手をつないで円陣をつくり、謡う。その中央に目隠しをした鬼がしゃがむ。謡いながら、鬼の周りを手をつないだまままわり、唄のおわりと同時にその場にしゃがみこむ。鬼は、自分の真後ろの子供の名前を当てることができたら交代となる。

——気をつけてみると、この「かごめ」は身を屈めよ、すなはちしゃがめしゃがめといふことであった。誰が改作したか、それを鳥の鳴のやうに解して籠の中の鳥といひ、籠だからいつ出ると問ひの形をとり、夜明けの晩などといふあり得べからざるはぐらかしの語を使って、いっぺんに坐ってしまふのである。—— 柳田国男『こども風土記』（岩波書店）

『かごめ』とは『籠女』を意味しており、妊婦のことで、『かごの中のとり』とはお腹の中にいる赤ちゃんのこと、『いついつ出やる』とはいつ生まれてくるかを表わし、『夜明けの晩に』というのはいかなる時刻に、『ツルとカメがすべった』は不吉なこと、流産を意味する。『後ろの正面だあれ?』というの『水子の怨霊』だとする俗説、あるいは、餓える村で子を問引く儀式から生じたという俗説、『籠女』は困われた娼婦であったなど、真偽は不確かである。いずれにしてもこの世の（ワザワイ・禍）事への想いを抱きながら大人たちは子どもたちの遊びを見守ったに違いない。

さらに「かごめかごめ」では、集団のなかでの孤立、排除される不安が遊ばれているのである。

鬼になった子どもは集団から孤立する。子どもたちが最もおそれる不安な状況である。しかし、そのワザワイへの恐れは群れの誰もが共有しなければならぬ。だから子どもたちは日が暮れかけ、夕餉の匂いがするまで、繰り返し、繰り返し遊ぶ。

この「集団から一人を除け者にする」という構造のあそび（鬼ごと遊び）は無数にある。しかも人類共通と云ってよい。著者は新疆ウイグル自治区のシルクロードの地、ホータンで幼い子どもたちが日本の「かごめかごめ」と寸分違わぬ遊びをしているのを見て感動した。近くにいた小学校五年生という少年に学校でイジメはあるかと聞いた。怪訝な表情

をする少年にイジメの意味を説明すると、大人びた表情になり、苦笑して答えた。「そんな子どもみたいなことはしないよ」。

「集団から一人を除け者にする」遊びの基本型は「鬼ごっこ」である。まず、集団の中から一人を除け者（鬼）を決める。「ジャン・ケン・ポン」や「ずいずいずっころばし」、「ちっちゃ子もちゃ桂（かつら）の葉」などと囃しながら一定のルールで鬼を決める。

「隠れんぼする者、この指たアれ 山くずせ ジャン ケン ポン」

で鬼決めをして、鬼を囃し立てながら子どもたちは一散に蜘蛛の子を散らすように隠れ込む。かくれんぼは古く平安中期に宇津保物語や栄華物語に「隠れあそび」として記録がある。古くからシナでも「迷蔵」という名前で親しまれている（町田嘉章・浅田建二編『わらべうた』・岩波書店）。

『ブリューゲルの子どもの遊戯』（森洋子・未来社）によると、「鬼ごっこ」は西洋では古代ギリシャ時代から知られており、中世の「目隠し鬼ごっこ」では鬼は「魔女」、「魔術師」とみなされ、一度その烙印を押されると目隠しされ火あぶりの刑に処せられたことから、今でもドイツの子どもたちは鬼が近づくと、「熱い熱い・ハイス、ハイス」と叫んで逃げるといふ。また同書によると、仕切られた柵の中に豚が放たれ、盲人達が杖を持って豚を追い、誤って仲間の盲人を殴打するのを見て興じるという見せ物に起源があるという推定、あるいは「目隠し鬼」は悪霊に目隠しをするという民間伝承に由来するという説も紹介しているが、やはり象徴的には、「集団のなかでの孤立、排除される不安、恐怖」が遊ばれているのである。

隠れんぼ、鬼ごっこ、かごめかごめ、坊さん坊さん、コンコン様などの集団から一人を排除する「鬼ごと遊び」の他には、集団の中に一人を受け入れる。いわゆる「子取り遊び」がある。「雀雀ほしんじょ」、「花いちもんめ」、「欲しや欲しや どの子が欲しや」、「通りゃんせ」など（『わらべうた』・前掲書）、いずれもなじみのある群れから離される不安と期待のない交ぜとなった複雑な感情が遊ばれている。

「通りゃんせ 通りゃんせ ここはどここの細道じゃ 天神様の細道じゃ
どうぞ通してくだしゃんせ ご用のない者通しゃせぬ この子の七つのお祝いに お札を納めにまいります 行きはよいよい 帰りはこわいこわいながらも通りゃんせ通りゃんせ」

親になる二人の子が両手でアーチを組み、子どもたちは謡いながらアーチの下をくぐっていく。唄の終わりに通り抜けようとした子どもが両

手を下ろして捉まえられる。

「通りゃんせ」は、怨霊となった菅原道真を奉る天神信仰の風習に由来している。七歳までは神の子で氏神様が守ってくれるが、七歳を過ぎると守り札を神社に奉納し、神の加護を失うという信仰に基づいている。守り札を返したあとは自分の力で生きていかねばならない、その不安が遊びの原動力であろう。しかしまたこの「通りゃんせ」は、江戸時代から殆ど全国に普及した遊びで、別名「関所遊び」とも云われている。箱根の関所の通行は厳重を極め、手形のない者は絶対に通さず、なにか特殊な事情（例えば親の重病、主人の危篤など）の場合、関所に哀訴して通して貰った。しかしその帰りには絶対に許さなかったことを唄っているとも云う（『わらべうた』・前掲書）。

このように、わらべうたに見る群れ遊びは、群れ（ムレ）にまなざしを向ける村（ムラ）の大人たちのいくえにも重なった想いに包まれている。

5 「幼老共生」という有機的つながりのある暮らし方

私は21世紀の初頭、グローバル化しつつ進行する産業社会の先に「幼老共生、child-matureold symbiosis」という暮らし方を展望している。血縁の有無にかかわらず、子どもと高齢者が生活を共有する暮らし方である。幼い子どもと老人のつながりを縦糸として、若い父母、子どもたちが地域の幅広い年齢層の人々とつながり、共に生きているという感覚を共有する。こうした小集団のあり方を「幼老共生」と名付けた。

子どもが人として成長するために、空気のように、環境として、老人の存在が必要である。また、高齢者にとっても、幼い子どもとの関係が



おばあちゃんにあやされて、にっこり！

人生を豊かにする。かつて狩猟採集の原始的生活や農漁業などの一次産業によって生活していた時代には、幼と老が身近に暮らすのは自然なことであった。人類学者の意見によると、おそらく人類は太古の昔からそうした多年齢の、高々100～150名程度の小集団が生活の単位であったと想定される。ところが、現代の科学技術文明社会は、ヒトの集団を核家族にまで縮小させてしまった。サルの子孫のように老人を排除してしまった。

以前に私は中国新疆ウイグル自治区、タクラマカン沙漠に接するホータン地区の農村で調査研究を行った。ここはシルクロードの要衝の地、イスラム教の文化圏で、見るもの聞くものすべてが異質なこの地の第一印象は、「懐かしい」という感覚であった。そしてこの「懐かしさ」こそ、私が主張する「幼老共生」のイメージと重なり合う。

幼い頃から心を育てられ、守られて育った人間の集団の作り上げるイメージが「ふるさと」である。現代社会において、懐かしい「ふるさと」のイメージは淡くかき消えつつある。

6 提案 保育園のまわりには必ず住みやすい高齢者住宅を！

では幼老共生という理念に基づいて、失われた群れ環境をいかにして再生するか？

具体的には、保育園の周囲に心地よい高齢者向けの優良賃貸住宅を配置する。たとえば、園児30名程度の小さな保育園の周囲に10世帯ほどの高齢者向けの心地よい住宅を設ける。この幼老の複合施設を作るのに最適の場所がある。小学校の統廃合跡地である。

明治以来、日本全国津々浦々、町や村に作られた小学校が今、全国的に少子化、都市部の過疎化等の理由で、統廃合されている。私はこの近代国家日本の土台となった、人々の幼い頃の夢を育んだ跡地すべてに、幼老共生のための複合施設を作ることを提案したい。その周囲には小・中学校、医療機関、老人介護施設、そして一般住宅を配置する。地域社会の真ん中には、幼老共生複合施設が必ずあるという社会構造を作るのである。もちろん既設の小学校にもスペース的に可能であれば幼老共生複合施設を併設する。

そこでは庭先からただ子どもを眺めて心地よく思う高齢者もいれば、近寄って言葉を交わすことに喜びを感じる人もいよう。更に、何か保育園の手伝いを望む人もいよう。若い父母と親しくなり、時に子ども

を預かる人も出てくるかもしれない。つき合い方はさまざまでも、年月が経てば、その場には必ず子どもを中心とした人のつながりが生じ、自然な人間集団が形成される。この集団は生活を共有する多世代の関係によって構成されている。こうしてできた集団の規模は、高々100～150名程度であり、狩猟採集の石器時代より人間が続けてきた共同体の系譜にあるように思う。自ずから、群れの共通感覚、人間らしい徳性の基盤が備わった人間集団が形成されるのである。そこでは子どもたちの喧噪と人々の思いが込められたわらべうたが響いているに違いない。



子ども達が遊ぶ場にはさりげなく老人のまなざしが注がれていた
(新疆ウイグル自治区ホータンの農村で 1997年)

<文 献>

1. 碓浩一：幼老共生、高齢者と子どもの生き生きとした関わり、外来精神医療、4 (2) 53～61 2005
2. 河合雅雄：子どもと自然、岩波新書、1990
3. 町田嘉章・浅田建二編：わらべうた、岩波書店、1993
4. 森洋子：ブリューゲルの子どもの遊戯、未来社、1989
5. 柳田国男：こども風土記、岩波書店、1976